

古代「さき」と呼ばれた地は、現在の奈良市佐紀町と歌姫町、陵山町、つまり平城宮跡と、その北方の平城山（奈良山、京都府との境の丘陵）に至るまでの地域を言いました。（書記する時は、「佐紀」の他に「狭城」「沙紀」、歌では「咲」「生」「開

の文字が当てられている。）

ここは、4世紀中頃～5世紀初め頃は、ヤマト政権の中枢を担った政治集団が本拠地としていたと見られ、当時築造された大型の前方後円墳など多数の古墳があり、「佐紀(盾列^{たたなみ})古墳群」と呼ばれる土地です。現在、確認されている100m以上の前方後円墳だけでも8基あります。（注1）

そして、奈良時代(8世紀)には、この地に、平城宮つまり国政を司る機関・大極殿、朝堂院、官衙^{かんが}・役所などが、造営されました。（現在、平城宮跡には、第一次大極殿と朱雀門が復元されている。）また、宮殿の北辺には、貴族の邸宅や広大な離宮苑池（松林苑）を築きました。（これらは、部分的遺跡のみ。）

つまり、平城遷都に際し、過去の墳墓・佐紀古墳群の幾つかの古墳を取り壊して平城宮を造ったのです。松林苑では、古墳丘と葺石を、築山や州浜の敷石に、濠を曲池に改造利用していることが、近年の発掘調査から分かって来ました。（注2）

（「続日本紀」にも、平城遷都のための造営に際し、元明天皇は管轄の役所に対し“古墳を破壊した場合は祭祀を行って死者の霊を慰めるように”と命じたとある（709年）。）

万葉集の奈良時代の歌は、当然のことながら、ここ佐紀の地（平城宮の部分は除く）を詠んでおり、6首を数えます。（他に、「佐紀山」を詠む歌が1首ある。注3）ところが、詠まれている歌から想像される佐紀の風景が、発掘調査の結果と「続日本紀」の記述から想像されるこの地の風景、つまり当時これらの「歌」を詠んだ人達が眺めていた筈の風景とは、かなり異なっているのです。

歌は、

① 「**をみなへし** 佐紀沢^{咲沢}に生おふる **花かつみ**

かつても知らぬ 恋もするかも」（4-675）

（女郎花おみなへしが咲く）佐紀沢に生い茂る**花かつみ**（真菰。花菖蒲とも）その、かつではないが、かつて味わったことのない切ない恋をしています。中臣朗女が大伴家持に贈った相聞の歌、朗女の片恋か。）

② 「**をみなへし** 佐紀沢^{生沢}の辺の **真葛原**^{まくずはら}

いつかも繰くりて 我が衣に着む」（7-1346）

(佐紀沢の辺りの葛の生い茂る野原、その葛は、何時になったら糸に繰って、私の着物とし着ることができるのであろうか。「野原の葛」を娘子に譬えて、早く妻にしたいと思う男の歌。)

③ 「**をみなへし** 佐紀野咲野に生ふる **白つつじ**

知らぬこともち 言はえし我が背」 (10-1905)

(佐紀の野に生い茂る白つつじではないが、自分の知らない所で、人に噂されているあなた。可哀そうに、私達は清らかな仲だのにね。「春相聞『花に寄す』にある女の歌。)

④ 「ことさらに 衣は摺^すらじ **をみなへし**

佐紀野咲野の**萩**に にほひて居おらむ」 (10-2107)

(わざわざ、この着物に摺染めで色は付けまい。佐紀野に咲く萩に染まっていよう。「秋雑歌」にあり、萩を詠んだ歌の中の一首。(今は自然体で行こうの意か。))

⑤ 「**かきつはた** 佐紀沼開沼の**菅**^{すげ}を 笠に縫い

着む日を待つに 年ぞ経へにける」 (11-2818)

((かきつばたが咲く) 佐紀の沼の菅を笠に縫い上げて身に着ける日を(妻にする日)、何時のことかと待っているうちに、年を経ってしまった。「古今相聞往来の上」『問答』にある、男の歌。)

⑥ 「**かきつはた** 佐紀沢開沢に生ふる **菅**^{すが}の根の

絶^たゆとや君が 見えぬこのころ」 (12-3052)

(佐紀沢に生い茂っている菅の根でも絶えると言うが、我らの仲も絶えるのか、あの方がいっこうにお見えにならない今日この頃だ。「古今相聞往来の下」『寄物陳思』の、女の歌。)

中臣朗女の①の歌以外すべて作者不明。女の歌3首、男の歌3首です。

6首の歌に共通して見えるものは、背景としての、佐紀の野原や沼沢であり、そこに生える**花**(をみなへし女郎花、かきつはた杜若、つつじ、萩)及び、**草**(真菰まこも=はながつみ、葛、菅など生活用の加工品となる草)です。そして、このような何処でも目する花や草に託して自分の恋心を詠む。このことが、むしろ、「歌」の主眼であったと見えます。(④の歌は、恋心以外の思いとも考えられるが。)

「花咲さく 佐紀き」の語呂の良さから「をみなへし」や「かきつはた」の花を「佐紀」に掛かる枕詞とし、「佐紀野」や「佐紀沢」を引き出す。そして、そこに生える花や草を題材にする。そうしたことから、佐紀の地は、湿地の多い野原であり、そこに繁茂していたのが此れらの花や草であった、と言われて来ました。ところが、実際は、平城宮の北辺の一带、佐紀の地の大部分は、幾つもの古墳と濠や灌漑池(狭城池=水上池か)を改造利用した離宮庭園であったのです。(注2)カキツバタ(あやめ科)と、ツツジや萩は、庭園に植えられていたとも思われますが、他の花や草はどれも、わざわざ苑池に植えたものとは思えません。歌の「佐

紀野」「佐紀沢」は、現状の佐紀の地を見ての詞では無かったと見えます。

とは言え、松林苑は、内裏^{だいり}北辺の禁苑（入るのに許可が要る王宮の庭園、離宮）として、平城遷都後に、徐々に造営が進んだと見られ、それ以前の佐紀の地は、歌から想像されるような「佐紀野」であったと思われます。奈良山へ向かう広い道の両側には、自生の草花が咲き乱れ、所々に盛り上がった墳丘と大きな池を望む。野原には葛や菅を刈る人の姿が見える。そんな長閑な風景が山裾まで広がっていたと想像されます。（春には、山に桜の花を見ることもできたようです。注3）

そこで、「歌」にして、変わりゆく「過^かつての佐紀」の風景を懐かしむ気持ちを表す。とともに、私が人を想う気持は、静かな自然の野原に、彩りを添える花や逞しく生る草にこそ託すことが出来るのだ。人工的に庭園に配された草花にではない。「歌」には、そんな心情が込められたと見ることができます。

更に考えられること。官人や宮廷に仕える女性達は、立派な松、柳、梅、橘^{たち}など植えられ、州浜に見立てた曲がりくねった池の傍で遊び、時には墳丘の上に建てられた東屋からそれらを見渡す。そんな豪華な園遊会と庭園風景を楽しむことはあっても、「今の佐紀」を歌に詠むことは、心理的に憚^{はば}かられるようになったのではないかと思われるのです。その理由は、庭園の景観となって眼前に見る数々の墳丘が、他ならぬ今上天皇の先祖たちの陵墓であると「正史」に記され（「日本書紀」720年成立）、やがてそのことを知ることになった故ではないか。官人達は、この古墳群は、遠い昔に遠くから来た豪族の一団が築いた墳墓だと聞いていたのに、今になって陵墓だと言われてもと、戸惑いを隠し切れず、「今の佐紀」を詠むことは避けたのではないか。

（奈良時代後期には、光仁天皇は古墳を壊すことを禁じる令を出している（780年）。）

「佐紀」を、歌の背景にして詠みたい時は、敢て「過^かつての佐紀」を登場させた。そこには、此の時期の詠み手たちの、以上に見てきたような心情と心理状態が働いていた、と考えました。

注1 現在、天皇や皇后の陵墓に指定されている大型古墳は4基で、11代垂仁皇后・日葉酢媛陵、13代成務天皇陵、14代仲哀天皇・神功皇后陵、16代仁徳皇后・磐之媛陵。後世に移葬された48代称徳天皇陵、51代平城天皇陵の古墳もある。他に、中・小型の古墳や、陪塚^{ばいちょう}・^{ばいつか}が多数あったことが確認されている。

注2 松林苑は、1978年の塩塚古墳の調査以来続く発掘調査から、古墳を取り囲むような築地堀跡などの発見により、その範囲が次第に広がり、東西1.8km、南北1.3kmに及ぶ平城宮に匹敵する面積であったと見られるようになった（2012年）。庭園の全容は明かではないが、ここで、聖武天皇は何度も大勢の官人達を招いて大園遊会を催したことが記録されている（「続日本紀」）。

注3 奈良山（平城山）の南斜面は、「佐紀山」と呼ばれていたと見られる。

ここでは、毎年変わらず山桜が咲いたと思われる。

卷十の春雑歌に、作者不明の旋頭歌一首がある。

「春日なる御笠の山に月も出でぬかも 佐紀山に咲ける桜の花の見ゆべく」 1887 番
(御笠山に早く月が出ないかなあ 佐紀山の桜の花がよく見えるように、の意。)

付記

ヤマト政権は、6世紀以前は、全国統一政権ではなく、畿内閣地の豪族による連合政権であり、その中の最高首長(大王)を擁する政治集団が政権を担っていた。大王墓はその集団が本拠地としていた地域に造られたと見られる。4世紀中・後期は、丹後半島の政治集団が、ヤマト政権の中樞を担っていたと見られ(古くから朝鮮半島と交流のある丹後半島地域の豪族の持つ、外交力・航海力・財力による)、奈良盆地の北部を本拠地として佐紀に奥つ城(神や霊の鎮まる所、墓所)を設けていた。(古代史研究者・塚口義信氏による)

佐紀の地図 松林苑の推定範囲



上図は、「万葉の旅」大和編(小学館 2014年)坂本信幸 他著の平城京地図・上部より一部を除き、付け加えたもの

参考資料(主に松林苑に関するもの)

橿原考古学研究所博物館HP「大和の遺跡」「松林苑」

橿原考古学研究所・友史会 2012年「松林苑の現状と調査成果」

奈良文化財研究所・なぶんけんブログ 2015年「奈良時代における古墳」等

「平城京の古代庭園」日本庭園学会誌 2003年 奈良文化財研究所 高瀬要一

「万葉集の植生学的研究」植生学会誌 2010年 兵庫県立大学自然環境科学研究所 服部保